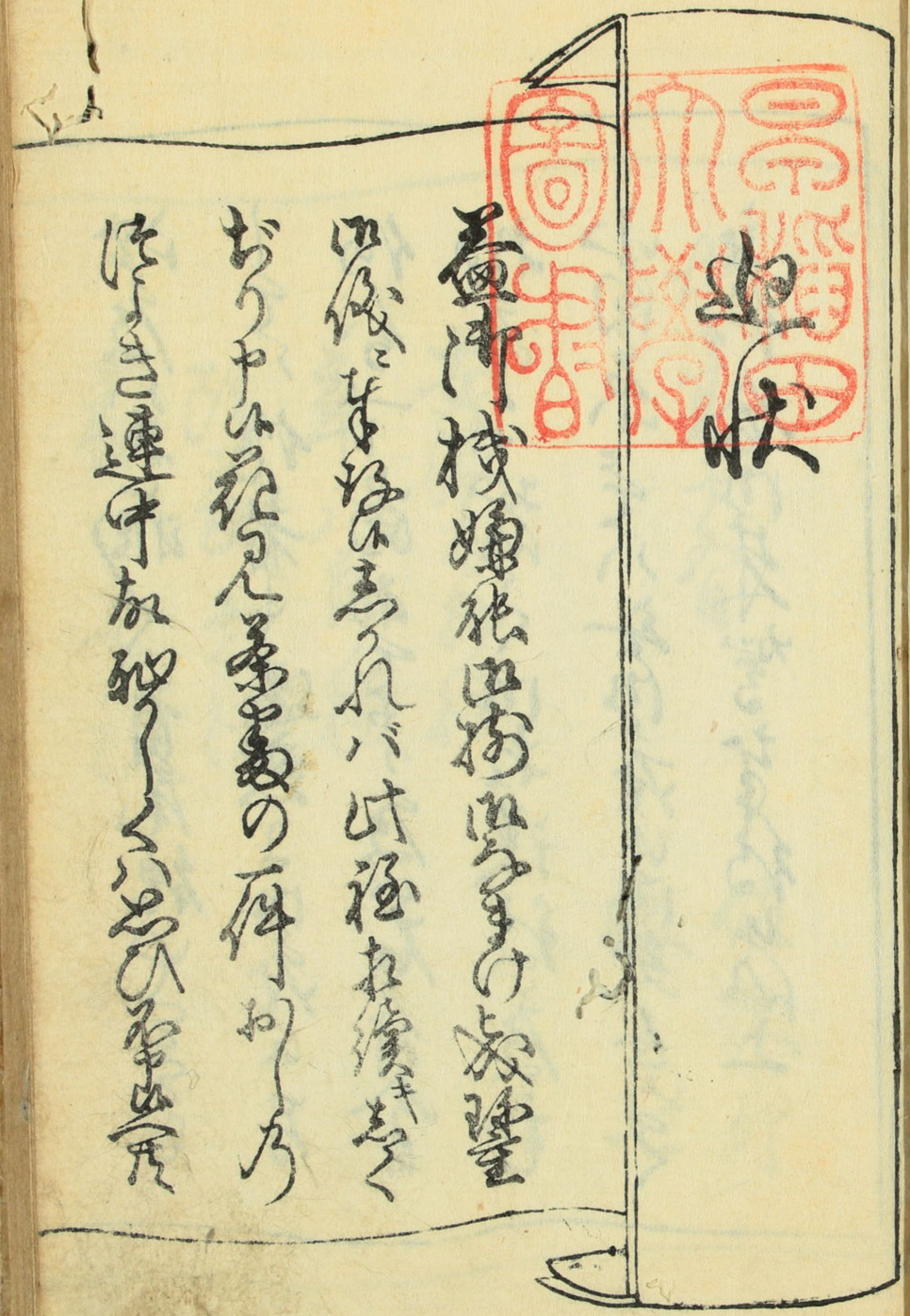
花暦八笑人三編 初日 五 上

へ 13
3209
4

利田



門 へ 13
號 3209
函 4

昭和十七年
七月五日
購求

此度ハ是非ニ首尾能ひてきぶと
して六作者も迷惑ニ此度ハ君
何分一ト尚あてゝ度ハ右ニ付今日
拙亭ニ於て此ハ漢詩度む
小田原ニて六無此度ハ此處ニ至て
其俗合此来駕を待ハ以上

中夏十五日

佐次郎
服七

安波太郎様
卒八郎様
臥武六様
吾七様

出目助様
野呂松様

のしはなまえは方ハ今日無来致は
宮戸川の丹吾そこなひ幸べくも
いぢきたるは連のはるゆへ後日は恨
なまぬ様なる事ハ[illegible]

眼七

文永堂開販

目録

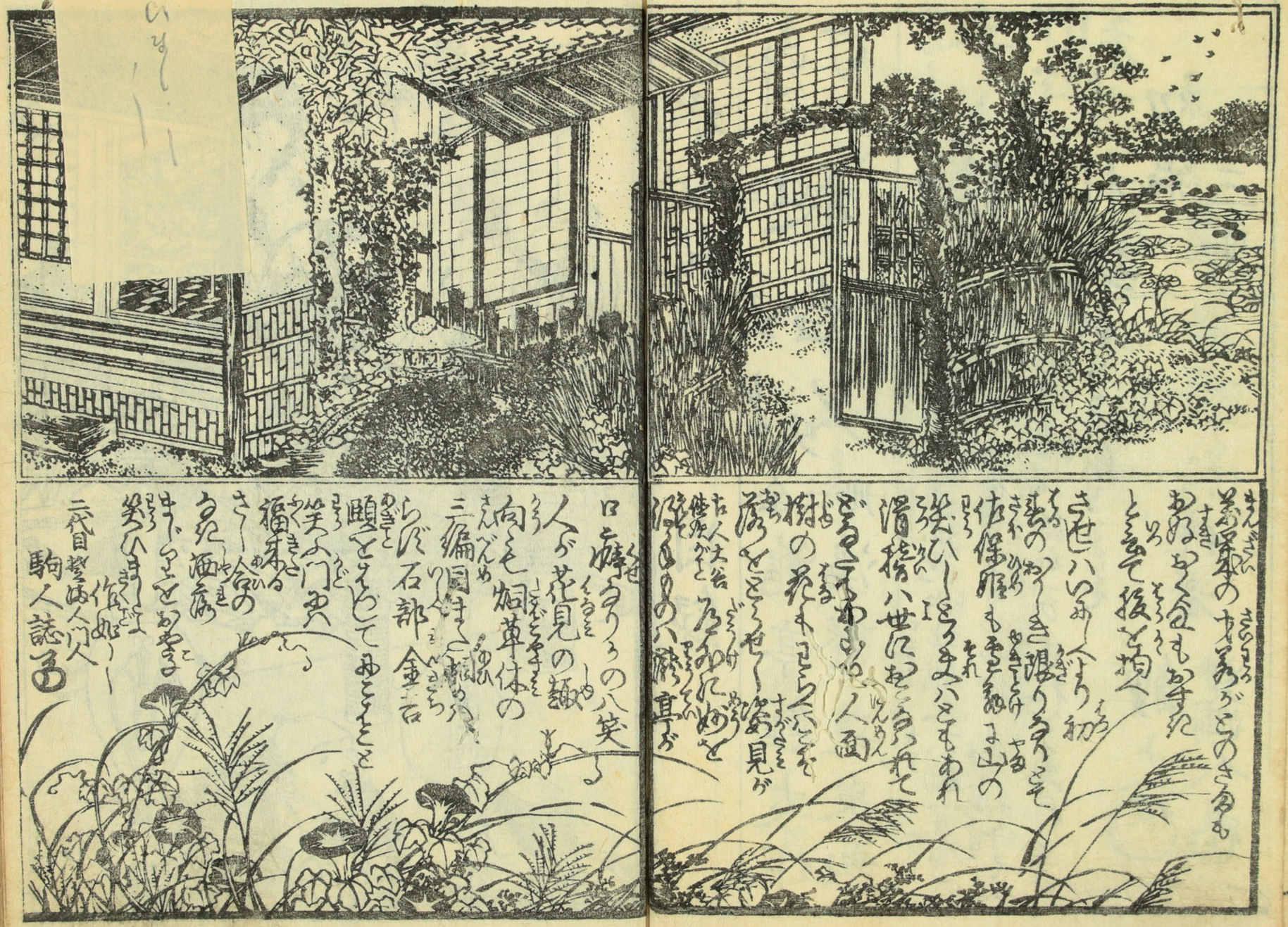
まつけ和合人 全三冊 瀧亭鯉丈作 溪齋英泉画

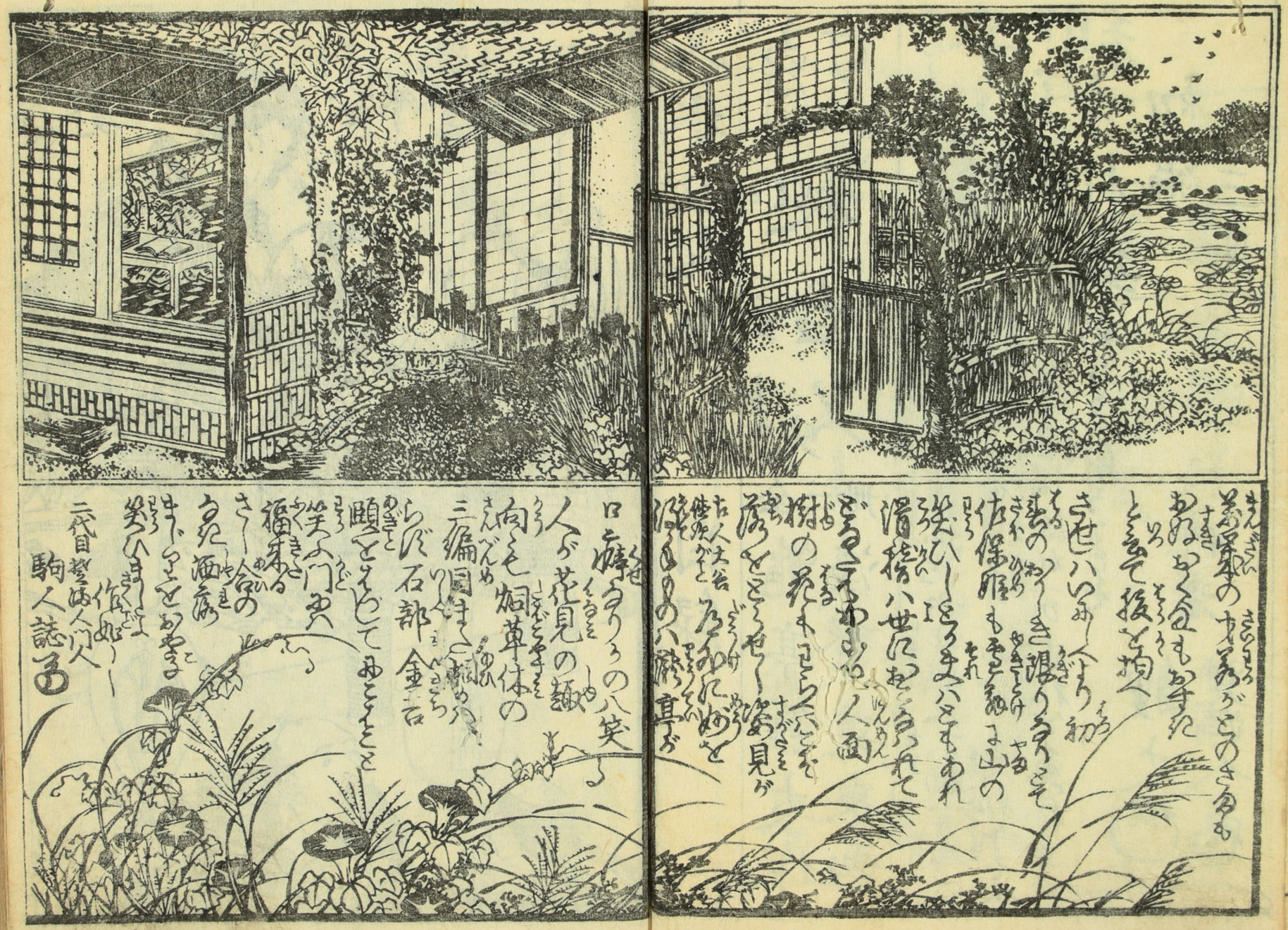
千社参利生札數

初編 三冊

此草紙ハ六阿弥陀六地蔵三不動一日廻りの
速足より五番目だうりのぶまやう者初午だう
まのうハき詣弥加一の古札をあづねまこと
新しく綴るまこそ

作者 鯉丈 見
楚満人 [illegible]





八笑人
三度
工夫を
凝して
滑稽を
醸せ
宮戸川

花暦八笑人第三編上冊

江戸　瀧亭鯉丈著

初編目次両国川
催涼蓮池之會合

春過ぎく夏来にけらしきのふまで笑ひし山の時鳥四季
前々の季遠ひ八彼本丁菴の戯に。春夏秋冬。
八笑人の座頭の佐次郎八世間晴なる楽隠居元より
人同悪だぞの。池の辺の吾会和青葉涼しき夏来
立鳥さそも我侍に。這ひたる座の戸表の方より
呂青八序文に託せし廻状の招きに集るなまけ連中。
打揃ふる六人連先に立たる安波太郎「今お粗ゆまれ
佐次さ夏八出在宿でござりますか。先刻八お役をもさり
ましたが。それに付安波太郎八弥武六吾七出貫助
肥呂松打揃ひまして来上仕りました。此度宜くお社次
お粗ひやまれ　トめんなのまれバいわりのうち初へんよりしていてつきのねさう
らうやうなれ人せうとりきまりなれがん七がえてにわかけて

そりや　眼「へイ〳〵これハ〳〵お見ぐるしいお顔だち。お相ひ宜しい
まして無ことも御大来まづ〳〵あれへお通りなされまし。イヤ一寸
お見舞申上ますが。只今申こまづ〳〵八文字屋ハ御無事か中心
のまづ〳〵と出来る様にござります。その心易であれへお通り下
されまし。眼「これハ〳〵此亭の御挨拶で痒をかき申す。全体
ヤこなたでハ、どん〳〵積ま入。おり畫も世こんが。かゆみを出る
こハ痛きへの裏だそこのでござりません。眼「へい〳〵お寄り遊ばされ
と聞バ眼くだりますとこれもかんまん事までござりますが。

家「ちとあの〳〵お目にかゝりまする事もおりのかうりで
ござりません。眼「イヤもう〳〵かけんげんしましたら。眼まだよおみやり
まし。サア〳〵どうぞ上へお上り。家「さま〳〵かまひませぬ
ちきハいつまでも苦にしませんのでこのけりますものので
ござります。サアおあがりなされ。眼「イエまづ〳〵おまへ「いろ
さあおまへがござりましてからこゝでお待ちあそばされまし。眼「イエ
だ、それもかうかうのでハございませぬが。なにとぞ中しておりまするびくびくの
ちやでもござりませんで、さまさまへもなにとぞ申しましてござりますが
これ〳〵

くさん仕ごとなら。お所やさらせんへ ひろッこひ 俗称人
だ。物もらひもあんまり。ひろッこひと猶ある事が ぬへ
眼七へト いろて。ひろッこく ぬへとからざに仕まうし。どろ
ちしても。来るのへおきらいでござりませう ハヘイヤ
主清左衛そふな。皆様来はあれへ。ぎんじませう
乗八へ いかさま。右衛の新亀が。餅りきてなんつらぞ
こぼりまを ゆへ 平長へ 左衛〳〵。それは口中がゐる
くさん板。癒 対いてまが 疑深。どんと糞ゑと

つかミ合よふで。ごぎりまゐテ 改義六 ヘ如程。あるな
たれよくかんづかれさ。ことくしれ又何のあるへかと
ぞんじて。猶かむかく致て。是人氣ゆさ汗ぐ。むかひ
氣ゆが氣ゆく。後ろうとぞんじほしさ 義六 ヘコレ眼七
ぞんぶ。へとんで居るがどかしさのぞ 眼七 ヘへとむ事れ
ごぎりませんが。あるさ方の狐臭が同じ人濡て。ぐう
とも。まうともいまれません。ことくしれモウ しませ〻
乗八 ヘヤレ〳〵嫌しや次の者があちらを向はしさから

はうち家くお上りなさん。とても簡先へれむかこれ
ませんぶ ヘマヅ〳〵あるさ 乗八 ヘサ〻おかまひなく フバ
ヘしからば ト 何かしらべらしく 愛無り座ふ有く 聖言 ヘ 偖ちやもう後れ。うち
絶ましく。まるのに清世ゑ。何か尚年れ。捨別の
大暴ふて。唯ゑ清ん配の腹。思入りまゐ義 ヘお
まれ〳〵。よふこその清入来。仲の通り旧あるから
見ましれば。殊のかおあつうごぎりまゐ アバ ヘこと
くしるのも。清無沙汰致しましさが。清存のとかり

婦人の義に存ましてゝ。毎度寸帳を切ませば
ぞんじながらハ〳〵依躰の邦。きびしい餘寒ぐ
ござりまれナ。左衛門へ左衛門ぐござりまも。寒に蒸
むしと。寒じまれ 改武六へこの餘寒にハ。よほど為が
迄入ませう 皆へいかさ丸イヤ 近年ハ餘寒になり
ましてゝ。志のぎ着まれテ 春モへなる程あるさなぞ乃
お清むりハ。蠅が止ッて辺り傳ましたのよかんで
ござりまれから。サヅひんましてござりませう アバヘイヤ

時に用るすもやさぞよ。如何な事ぞかりやまれ
も。わんの餘寒の仕るすで。サヅおよかんましうござ
ませう 豊へさせう〳〵。宮里用績をやはしても
餘寒ろうとぞんじまれ。左衛門。先ごさしから。霧云
致しませう。物今朝ハ法仕。法白状の趣。委細。和
知。仕今魁ごさ〳〵。矣上のおるし。矣奥少〳〵
お国に掛まれ。先是ハ鯨ぐござりまれ トかゆらんの人形を出し
躰のわかあじハよれト。ヤるすでござりまれが。又中ハ

鯖ざともやまほ　左衛へハヤ如徒。これハ一下しゐ黄
敷いたしまほ　聖呂へそとぐ鬚を一本さし上ませう
とぞんじて。今朝より夢ましく。生洲へ活くおき
ましたれが。あまり生洲を掃除致して。水をかへまし
たら。濁りがなくなりまして　ト発かんさしのもちきを中てもち起ハ如て
仕舞ましたる　左衛へハ是ハ〳〵。いろ〳〵清叮寧に
聖呂へさてあるびを一ッぢれ見上まほ　ト手あるびのつりがねトけじく小田原ぢやう
ちんをてんびんにうけていざし　此挑灯に鐘を鮑とやまもる欲ハ。汗

重イとやるすでどざりまも　左衛へイヤ何よりの孫
物。さんさん今日ハ精を日ゆへ不坐鮑丁致ませう
又春モ入かけ日じく　春モへへイわたくしハ。今朝よんおるき
まうけべらしく
拵び用で他行致しとゆへ。さきがの私しも嵩にも居
む。左衛もいたしませんおへ清侯ごとやるすで後かく
宿でやまほるハ。池の端さまで開帳が始りまもそふ
ごとやまほゆへ。旦状の習違とハんづかぞ。それハさん
さん。私家に先祖大食乱。小もそれの代々。ほと

ありましたありがたい宝物がござりますゆへ。灵宝
湯へお貸申ませうとぞんじて。持条致しましたと
弱形の内田のたるを出し これハ宮戸川より。出現ましたる所の
酒無理如来の尊儀。生得大酒の法語にして。一ト
揚鬘する輩ハ。情愛賽難。かんのんをのがれ
苦労ふ知。又無尚友得をなぐせのふとの。法語
取るれバ。いかう辞て。五重上りませう 服せへイヨく
どんど灵宝あれ〳〵 入かわらく 臣武 へへイ 私しハ

又蝿帳をお買ひなされたと。笑遊ひましたゆへ
その中へおたくさへの所を。かくさし上ケかうと。ぞん
じて。刹ちこれへ持条致しましたト 女童戸の画へイを一枚出し
是がまづ。産禅。豆でござりまする 又菜又世の女絵を一枚出し 是
ハ。納豆でござりまする。トヤ 頃ハ去ル お寺さまの。咲
ものごトヤるでござりまする 左衛へ 是ハよく 慣した
様子で。味そふにまゐまする 臣武へ さて此絵ハチト。兼
相な。出来でハござりまするが。田舎粗云の無名の

東菊

逢阪屋

左一郎

鐘の。畫でござりまする是が則ち。梅がえ田夫で
ござりまする。是ハ清自画と見へまする。一ト
しわ。賞翫いたしまする 段武へ ここでこれハ。ちと
時代な絵で。清盛の妾で。貞女を捨て。貞女詠
立てを自慢の。常盤味噌。そばに今若。乙こう
牛若の。教の子もそへてあげまする 段へ 是ハ〳〵
いろ〳〵の好物。五難くござりまする 又乗八へかわり手
車へ ヘイ和ゑ又なんの了簡もなく。唯こなたで一ツ

たべよふとぞんじまして。賞者を一種。拵糸致し
ましたが。ちと荷が絡ましたゆへ。車を一時雇ひて
さんじましたゆへ。先車清ん手にとらうを。チト法付ケ
ませうト車力の思ひへ入てもちまきもろもぞぬぎまあり ハイ此絵ハ段武ニいさん
から。池の端までか子ト彼の糸柳の画をくるまへのせて おふぐアソウ。そ
こぐアそ。ウヽ〳〵ハイ是へ揚て盃まする。ヲイ あの
文戸川の構ハ。左次弟さ反までか子。ハイ〳〵かしこ
まりました。イヤどうこいなアしふぐアり〳〵。そこぐアく

うんとゆくへイ弱形の内田からさんじましと
判取は海りにお寄申ますから付て置てくだ
さりましゆいそがしいぞくゆイ此おぬぐんは涼
川へくら敷の子ハ身清へそゆやゆ妙ご酒子は
志ろうどろうゆウどゆそこどゆく 呑七 へイヤ
是はけしかぶんそふぐしいるすごぞ 服七 へ志かし
能お仙合なさりましゆイ裏路さん車力鉄
を費をうへ事さんゆしといふ身ご子 煮 へ東西く

奉八 へヨイ此鐘は西村から道成寺さ及までこう子
ホイ小附に。小田原挑灯か。これは通りみちごから
畳一畳書さんの所へ。どうけるのうへかしとまりゆしと
ハゆうどゆく。そこどゆく。ヤレく菓臥さく
是でまづこんな片付ると ト座をへイ方伝なら。おゆく
そくの。鉢者をさし上ゲます ト今の車をへイ是が
方ろの。少つけでござります アバ へヤレモく。そふ
ぞふしい。少つけだろけ。物をやまさしいチト餘り

子爲繼子のやうでいとぎりませんど。世に稜皆
さ及へお嘆き中たいるのがござりますが。今日見へ
出まれ節。衣類を着換やうとぞんじことゝろが
彼吉原の人底方より。まへッと玉章をツイ見
おとしまして。山の神に見上げられました。サア八里
半ざと。二ツ割にいたそふとまうせ角を。二本揃へ
て。そかし大嫉妬なりましたく。まだふうも切り
ませぬ夜を。此やうにづくしなかぶられましたが

彼人底も折角人目をしのんで。丹誠いたし
偲めましたものを。むざと捨るも餘りふ後でござ
りまするゆへ。川ちらしましたを。かゝ拾ひ集めて
さんげほしさが。どふぞ皆さ及。清工風なさろて。お續
とけてさりますやうに。相殺ひまれ服七へイヤ見ハ
孫にしいるのが。出来殺しました。如程あるに拵へ
女の夜の氣るるのなるのゆへ。清ふ得ござろう
どふも別ぬるのは。よめ差るものでござりまれテ

遣ぶんる懐ましこさくしどもゆく濟ぶれよぞ
ませうが。餘りチひどんおこまるさう方でござれば
なんぞ更賃がなくれば。ごのもアバ「それは勿論の
るす。いづれ濡る所は。所金は無ひうちのこと。鉄と
いとひはござりませぬ文言さんとうりまされば更
賃はよぞます 左衛「左衛なら見へつかはされアバ
「ヘイ〳〵コレどちらぶじまし。なさけなく〳〵裂まし
こそ。分明まされば宜ござりまるが。先それくお

とさし。中ませう 左衛「ドレ〳〵ハアなるる。天地紅
で。イヤごのも艶るるものでござりますナ。フこなん
ど。卵かけねがひおげかアバ「ヘイとうりまし。卵かけ
ねがふとゆまれ。縛りだるしの切でも。ござりまる
まんから。おりさりと稲え結はなさりまし ト稲え結を切
左衛「物となんどハアこがれおりのしアバ「ヘイこがれ
おりとゆ。お礼まれ浅妻紅の。画をさし上ずませう
左衛「イヨおりしろし。サア見ハ志みぐおれッこく

かゝこうまいナアバ「志みぐ〳〵だれッたくれト祝事を
よく摺くお出なされ 服七「ヲヤ是ハ紙が違ッて
居るが。フレ一ツ百二十匁の酒五合。三十匁の味噌
共ハ〳〵みりん一合。ヲヤ〳〵ありヤア酒屋の出出し
だぜアバ「ハヽア此程内田の出出しだ。なんでも柱合て
嘆アに来ぐらより餘けれ。君上ぐられましたを。漸く
残りを集めて。来りましたから。中へまぎれ也まし
たと。うんゝる是ハおそづかしいものを。お目に掛ました

服七「モシこれあれ。うけ賃なしかるアバ「ヘイとれハ
チト受賃を。生徒の子もどぎりませんが。アア
まゝよ。たしか〆ハ三百五十二千てどぎりましたが
寿を一本あげるから。まりぞりをらわて。おくん
なせ人 喜「ハヽ寿姉〳〵。ザア是ハなんだ。こらね
茶と。ハヽ まの字が破れたゆだ。そゝまわらぬ
ふぞゆ人。よしなふ 清よ みこけどアバ「ヲツト思ひね
茶るら。此ぶん思しへおそめなされ。自堂に思り

まゐ。そこぐもふるしうね 服七「イヤまだ夜ふ。一ト
切ありぬを。呉ぐし清たがへるふ。清いぐの袖ひとへ
ひとへよアバ「くれぐし。おまえ遠なく清出なれば。ト手あそびのあんどうを
いざし先といふぐござりませう。しかし夜さう昏中
ふ。出まゐるのもござりますが。それはきうの用るので
ござります 服七「イヨ夜傾の清瀬向。清ましたへん
サア出同助様。おまんの事ざまく出瀬向。うけた夜
ありたれ子 出目「どふ致して出ぞんじの。悪案の私し

とても瀬向も五とふもござりませぬ。室は一ッとな
ものでは只人さ夜のを二とくと致して見るだうりと
ござります。前を出まゐるはふれと出ましたから。売
手でござります。しかし途中で此絵を見出りほ
たが。餘りいせぬのよれ画ゆへうわかり賞とさんじほし
さ。是清らしじまし。四天王が蝮を退治致せ。和で
ござります。是でもお去産は。みんじませう。左衛
「それはちや思し。后は立がたふござりまゐが。私は

たちものでゝ。坂ハ名しくたべませんテ。そこで其の
跡が。どふいふ浩鉛白だ子 背「ヘイ只今ゆスとふり
和に鉛白がなしいるハ。非めくどぎりません 服七「いし
でも。鶴を出して斗りでハ。瘡瘍ゑん葬のやうで余り
手の無イるでどざりますす子 背「さやうなら正直に
ゆませうが。此鰒を持てく糸ッこのハ。なんにもせぬに
つゝ窓から呑うといふ。心いきでどぎります 服七「ヤレモ
むぞふさなるすぞぞ 左衛門「鰒だから。おれ方そんな

るすぞろうと抑もひましたテ。イヤ皆様浩鉛白
かんしんく ゆバ「俗ことしども如何に。おくづくも
去産を持糸致しましたからハ。おるさからも何
ぞ。浩鉛白がありそうなものぞ。どぎりますナ。呑七
「いうさぬ。おうしそれハ定めて。浩鉛白でどぎりま
せうナ。服七度 服七「ヘイくかしとまりました。ゆく志かし
今日ハあやにく。仕丞がどぎりませんぞ 背「イヤその
お仕丞のなれ不で。何ぞ一二種ちよッぴりとナ。左衛

「さゆうおんしゆるるゆるから是悲がなれ。勿論料理裏も。おり合せませねゆへ。ことこしが抓こ料理をさし上ケませう 聖呂「これハいちばんのうすでどぎりませう 左衛「ヘイ。さんそくなるがら。向島の名物をさし上ケませう トアバたらが多がらをいぐし おまるこ方もなれうそトハゆなるがら。アバた命反がアノ彰ぐ。意が出来こト云れた時ハ寛に後の皮がいこれ径おかしうどぎりましこおまるこ方ハいかぐでどぎります 幸「イヤさやおかしい

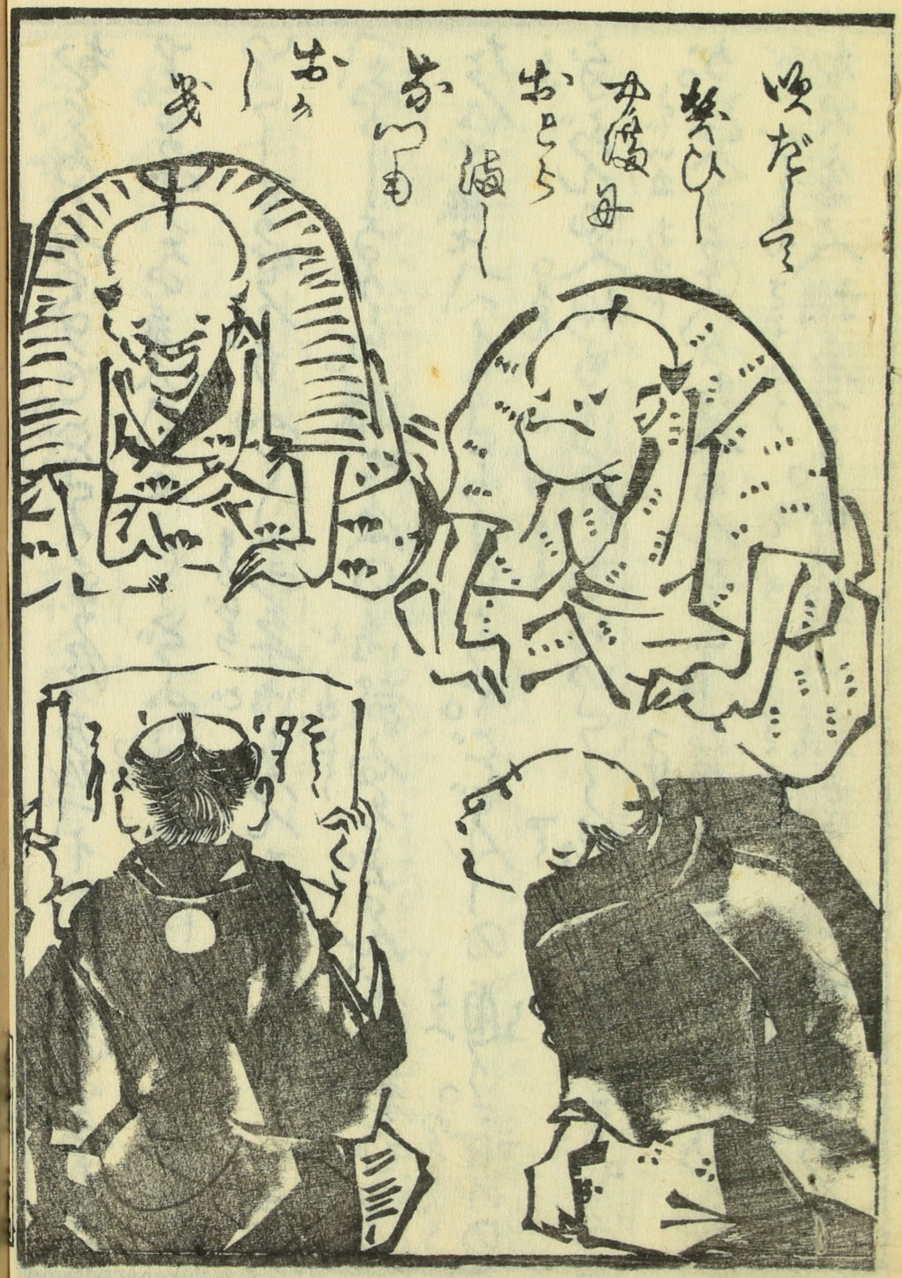
だんか。此彰色でいろるすざんまれ。イヤ大笑ひでおざりまれ 左衛「ヘイそれが別ち。笑ひ意ぐどぎりまれ 聖呂「ヤレく。貴鉋丁のこド付けあんぐれ。かんしん。殺しましこ 左衛「狐又重平かなんぞ吸う物を。一ツ上ケませう トス多がらをとりちらし ヘイ。是ハ嘘屑ぐ。どざりまを。タイ眼ひちゆんと立てもらいて人 服七「ヘイ〳〵イヤどんとい。パイたちましこ 左衛「帯を解し 服「ヘイなぜでどぎります 左衛「ハテサなぜでもいひうら。

きりくとうりせへ。皆稀へ清純を去るのぞれ 服七
へへアマおかしな。清ちそふぞゾト 服七れ ふせうぐよ おびをとき ハイ 解
ましさ 左衛へとひさら 単袖をぬぬぐ。夏へ出さツし
服七へヤレモく 漸く昨日 黄さ。単袖を モウ ぬぐのか
なさけぬへるすぞ 左衛へそれぞから入用だれ 服七へハイ
サア それへあげまほ。どふぞ命ぞうれ。おさまけ下
さりほし 左衛へ 偖此服七が 単袖ハ 此る 富沢町で
黄くさんじほしさゆへ。是が三ツものでどぞります

又 詠で。お茶漬でも。お上りなさる手当ハト
服七が 褌へ ゆびをさし とれは 黄染が。どぞります 右衛へ 是れく
紙のお菓漬までお手厚なる。如 祖此お黄染
れよく 塩がしみさかうで。見さぞうでのどが ピリく
かゝれまほ 呑へ 志かし 鬼メなら。虎の皮で 致し
そふな。ものでどぞりますナ 左衛へ 是れどもんともで
どぞりまほが。何分 急 薬ゆへ 紙 書きませねと
も。おぞりますが。そこが兄弟同様の中ゆへ。あるこ

がこそじめ同じ様なるすをいくなくどふ鈍し
ますれが。矢張お着一種ぐどぎりまほアバヘヘヱ
それハみ。どふいふお着になりますを。ヘイ兄弟の
集りほしさ取人銀向が工夫出ませんが。これが則ち
綱麺でどぎりまほ。極おのぞこなら。まごいか祖も
お着ハ出来まほるが。やはり鈍しませう。ヘイヤく
もふ沢山でどぎりまほアバヘさやうく。此人まご
どのやうな。おじ付け料理が出まほも。志見ません

おそろしいるすで。どぎりまほ。ヘイヤ法遠慮なさ
里。ますな。年八ヘイヱくどふ鈍してげしておぶぎハ
いさしません。もふく。志平法免んなさりまし。当
ヘ志かしながら。眼七夜の法銀向をなんぞお願ひ申
たほけ。眼七ヘヘイヱさらしハちや。どぞんしの通り。吾ゆの
身ぶん也人何も法鈍を。のいさし根も。どぎりません
が。只今五人が。たほめんをとじ付ほしさ。尻に法ひく
賀全人相應に。曾我の役割を。一両人法らんに



いまいませう 段武 「これハ又。鬼がからんこゝおのしろう
どぎりませう 服七 「さて先和しが。鬼王貧左衛門ぞ
どぎりますすが。此爺二役勤ましる。なりましたる
其後ハ一向中酒が吾なくなりまして。此後ハ猿口に
口ッ不ッもたべますと。旦元も定まらぬやうに。なり
まゐ。是を名付く。弱ひ酒の知よろくと。中まゐ
背「ヤレ〳〵 生ふおとらぬ。こゞろけ人でどぎりますナ
華八 「さやうでどぎりまゐ。弟蓋の枕ぞなり。長くて

なんてゐもなる。るす斗りゆまゐ 服七 「ヘイ左様なら
枕なしに。段武六さん一すお目にかゝりたい 段武 「ヘイ〳〵
何法用でどぎりまゐナ 服七 「ヘイ此人の顔が。おぢむの
髪たゞで。小鬢光にハ。兀清もどぎりまゐ 段武 「チヨッ
いゝえましい。まゝ面の店おろしぎ 服七 「そこでどゝなる
でも。お鼻紙を一枚いたゞ記たい 子アバ 「ハイ〳〵 是ぞ
よしう 子 服七 「これハ有がたふどぎりますす。ヘイと是ぞ
とぐに。京物でどぎりますす 華八 「法語向ハナ。服七

「ヘイ無銭の算賦。小半紙の。安ひのでござります
当「イヤハヤたゞ〳〵京物が。出さと抱へば人の。算
紙をつかひ餘り無糧な。ゑんせくでござりまゐる
聖「それが則ち。勇我の殺端でござりまゐて。アバ
「とは又ぶいふ訳ぐ聖「ヘイ京物は。勇ぼで。ござ
りまゐる 華八「ヤレモ〳〵。ぐるしいとゞ付ぐ。ござりま
す。左衛「モウ〳〵。ぴかぶんに切り上ケさ〳〵。抱子にかく
法く。おじつけるはおはしくも稱へ。サア〳〵酒に無う

酒に無う。甚マア無戸川をぶちあけよふ 聖七「ヨウト
ゝさり。サアこゝちの壺の中ぶぞ。ヨイ出国公式片足出し
て。くんな甚うちこゝちは音を出るのぶト是より例のきかり
左衛「サアあんまりよはねへうち。胴鼓をきめて無ふ。且
状ゆも。一寸出ては出しさが。今夜の寄合は。夾の花見
菓蔓のるるぶが。あれがだまつて居ると。誰もかまはねへ
が。先才一蔓にあれがいるぶいく。甚次に野呂まが
おくおるさるんざうらさまがいとゞ法け連中も。その

つらぎのらゞかんハとぞ。しゝ人がなりんさからぞ。
べつさりと。つぶれて居さが。なんと見ッきとし。ヘンおん
まり見ッきとも。おねへそれどサ八人男が歯を合さ
るを。反古まハされめんでハねへ。それともおくぶるまで
ふも。報向がつかねへのか 率八 ヘン 作ふやきふらうサ。いふ
ふやおよぶサ。報向も業じも。山くだれどゑんなが
ひるんでいる様子ざから。おれひとりまんでも。はじまら
ねへからアバ。なんのく知るむの。夜むのといふ。けちなる

が。あるものか業じハその時。つけて盃さが誰も。なん
ともいらぬ。対に毎ばんのせうに。菜裏ハ引つぐらし
出目 ヘそりやア。おれも同じるすざれど。それにおらア
女の方だけ。接別用が多イからツイ左衛門ヘ引。又
知ちくまじめるよ。マア胴読の極るまぐハ。屁へうと
でも。押つけて盃ッし。そこでマツ影うおよふといふ
注文ざ 路武 ヘそいつア妙ざ 春七 ヘまざなんともいるねへ
ハ。路武 ヘどふりできこへなんが 左衛門 ヘムこり 古風な。豆

蕪ざ〻見サマヅ。まぜわけまぜるに荒増の[illegible]
を。使ッしな。どふも熟イくせごゾ。フンそこで左衛門マヅ
此頃向の初一念といふものは。毎日〻八日續ける
法もりの所が。隙二十駒のあし早く。光陰に関もり
なく。木梢の花も青紫と変じ。此るまぐ法云
を。いひし鶯も今は。練子をさへ育て上ケ[illegible]
むおこ 乗八ヘイヤハヤ 奇妙な お債のしまふ[illegible]ぞ。まぜわ
けんせといふ[illegible]ね人斗りな。いひ根をまるものごから。さへ

てい。居られぬ人善ざ左衛門それごとかく。おいらがする
お債に。只の人らしく。獄め根〻な義で。左根殺し
ままれば。め根おぬまをなんぞとぶ風雅にもいられぬ人
ぢやアぬ人ら 乗八ヘイヤ〻ぢやぞうふ風流がいく。おめんは
常の人でぬ人のもりでも。あんまり銭の出て人とも見えん
ぎサ。なんでもお債るのは。どこまぐも此きるにいく方が
いい。そしてなんごろむごないてぐさが。馬鹿ぢイに。おかア
しく。節付をして云もんごろつ。ツイ本業何[illegible]と

いふ。へんじをまるも無理ハ非ヤアくつまんでいくを
夾の花ゑん菓裏の秋りを。六人で一ト粗言づく。ぜらふ
と。いふるゞざろう。長ハそふよそふざそれど。八人のうち
夾二人渉ぐ。俗が夏まぐのびさら。いゆるの事
今年中のたのしことしてサ。夏二日。秋二日 冬二日と
割付よふといふ淫りのざがどふざへ 吞七へ今それも能
らう 長へ先陳の年ひが面倒ざから。ぞれト八日同
まぐの。名題を掛くて出て垂さから。是を寵よ

しく。鯨を寵て垂うぢやアねくう 眺モ へヲツト寵も
名題も。ちゆんと出来ていゆまト 眺モ ふつう戸より丈ケ長く出て名ざのとくじをうやく
おく三ぞうへ 雲呂へイヨく 是ハつるぞく。グツト是で 隠を
めれてきて。席ハ狂言名題を。陸披口く 長井へ白イ
緑香。清明香アバへまて吏るよ。漸くまに舞蓋
が。おまりかくのさ所ざ。東西く 長ハイヤ披口ハ寵を
引て。皆役割を出のくから。讀ませう 幸八へ今それが
いりく。飛鳥山の花の雲。胡地めまする。役人ハ

る名をひろくしきう出目「ヱて中の盛しい名人。サアく写絵をど
出しまゑ。ひゝうりかくト云人あれもく引くくどの名まへをしくさき
とゑるまり出しの役まり其のとより

初編之目次
程行日々通総ゑる

飛鳥山	友蔵
隅田川	豊松
両國	平八
高田	眼七
花屋敷	ゴ参良
海安寺	孫武六
吉原	呑七
浅草市	出目助

村田